

弩真ん中を知る ㊦ 三月十一日

児玉雨子

寝不足だったから、私の指先とつま先が震えた。指先は自由だったけれど、つま先の方は靴下とローファーの中で縮こまりながら。どこまでも不自由だった。瞼も震えた。

かと思えば、目の前のショーケースの上にある見本用のサンドイッチがなだれ落ちてきた。地面にレタスとトマトとベーコンが、スクランブルエッグが、焼かれたパンが、ケチャップをぶちまけて私の足元で死んだ。……本物だったんだ。隣のミックスジュース屋の、ミキサーが振り落されてガラスとバナナジュースが地面とぶつかりはじけ飛んだ。

私が震えたんじゃないかった。

ホームへ伸びるエスカレーターを見ると、動いていなかった。汚い緑色の手すりに掴まるギャルが、足首にキラキラしたウオレットが巻かれた黒いブーツの、細いヒールの先を削りながらしゃがんで怖いよおくと叫んだ。ジュース屋の店員が急いで残りのジュースを取り外して、サンドイッチ屋の店員は慌てて私の前に跪くように地面の死骸を拾い集めている。体勢を右に左に、跪くというより床にしがみつくように。バリバリと耳まで引き剥がすような音が落ちて着くと、駅員さんが駅から出るように、車掌さんよりもはっきりとした人間の声で言った。さっきのエスカレーターから沢山の人が押し寄せて、携帯を鳴らしながら開かれっぱなしの改札を越えていった。

怖くなったから、私の指先とつま先が震えたんだ。コンタクトで乾いて目まで痛い。寝不足だと、顎やまぶたに触れる伸ばしかけの髪の毛の感じも変わる。汚く尖って感じる。まぶたや目尻に触れるたびに、ものもらいになりそうな気だつてする。ただ今この瞬間は、そんな小さな苦しみも目に入らない。それは余裕のあるときに感じ

る、贅沢な苦痛なんだ。

町田駅の長く古い柱が折れて、このまま下の大きな道路へ、ルミネの地下へ、落っこちてしまうんじゃないかって思った。八王子行の方のホームと改札口はヨドバシカメラとかデニーズのほうに陥落して、桜木町行方面は謎の駐輪場へ傾いてしまう。お笑い芸人が面白くないからってパカッと地面が真っ二つに開いて落ちていくみたいに、いつ落ちてしまうのか、次の一瞬がどうなるかわからない中で指先とつま先が震えた。

私も変えたばかりの 아이폰 で、両親にショートメールを送った。電波が悪かったりすると吹き出しが緑色になる。いつもは青いのに、やっぱり私が送ったメールは緑色になってしまった。どこに行けばいいのか、どうすればいいのかわからなくて、でも無性に家に帰りたくなった。どこか誰かいるところに「帰り」たくなった。いつも使う駅だったのに、三年間使っている駅なのに、私の知らない町田になってしまったようだった。

「すみません、駅構内から一旦出ていただけないでしょうか」

濃いグレーの制服のおじさん駅員さんが、売店の前で立ちつくしていた私に声を掛けた。肩のまわりには少しフケがついているけれど、申し訳なさそうに眉を下げて微笑んでいるから本当にふわっとしたおじさんだった。

「え、はい」

一旦、でなくちゃ。開かれた改札の向こうにはたくさんの方が居る。

「すみません」

「いえいえ失礼しました」

えらく物腰の柔らかかというか、こんな時でも丁寧な人だなあって

思った。早足で改札まで向かった。ピンポンが鳴ってあのゴムつばい扉に挟まれないか、習慣づいた危機感が少し足をすくませたけど、それも鳴らないでまっすぐに改札口に出られた。太ももがひやひやした。

すると放送が流れた。横浜線、京浜東北線はさきほどの大きな地震により運転を見合わせております、現在運転を見合わせております、現在運転を見合わせております――

改札口に集まって駅から締め出された人がざわめくと、改札の前に大きなシャッターがゆっくりと、大きく、不安な音で降りはじめた。え、帰れないじゃん。待って。泣きそうなくらい心許なくなっているのに、声も涙も何にも出てこなかった。周りで友達という他校の男子高校生が、俺たちを見殺しにする気かあー！ってふざけていた。私にはふざけられる余裕と友達が、その時その瞬間周りにいなかった。

誰もいない、何も無い、寒い、脚が凍りそう。だって今日はさつさと帰ってお風呂入ってたっぷり寝るつもりだったのに。一日中頭の奥底がくらくらしてるしてのひらは熱い。あああどうしよう、知ってる人、さびしい、ひとりにしないで。とりあえずまたアイフォンを出してミクシイを開いた。トップニュースがさっきの地震のことだらけ。でもつぶやきの欄に友達がみんないっぱい更新してあって、みんなが手の上にいるようでほっとした。

学校近くにいる人は学校に集まりだしているらしい。どんどんみんなが集まって固まっていく。やっぱりひとり不安だった。誰かが隣にいてほしい、誰でもよかった。私も新規投稿の画面を開いて、皮だけが凍てついて中身は燃えるような熱さの親指で打ちこんだ。

《りん・町田の駅出されちゃった、ひとりなんだけど誰かいない？  
こわい》

一分一秒も孤独を埋めてしまいたくて、何度もページ更新ボタンを押して新着通知を待った。何回押したんだろう、私の中では十分くらい経っている感じがしていたけれど、通知を見ると私が投稿してから三分も経っていなかった。

《よーこ…あつうちらも町田いるよ、ルミネのまんまえにいる！》

両足はその返事をする前に、ルミネのほうへ急いだ。マルイは入り口にシャッターがされてあって、その前で座り込んでいる人もいた。ルミネもシャッターというか、いつも開きっぱなしのガラスの扉が閉められて、中の電気が消えていた。ロクシタンなんか、店をそのままひっくり返したみたいにハンドクリームも香水も、パッケージの商品もひっちゃかめっちゃかに転がっていて、店員さんが落ちた商品を拾い集めていた。

その扉の前にいる五、六人ほどの同じラインの入ったスカートの集団が、そこだけ他の世界と切り離された、教室の一角みたいに思った。そこだけが私のホームだった。それにその輪の一番奥にいた葉子の姿を見ると、いつも通りの学校帰り、横浜線に乗って二人で帰るような毎日が、ちゃんと戻ってきてくれたような気がした。

「葉子！」

「斎藤！よかった無事だったかあ」

集団の真ん中にある、マフラーとセミロングの髪に埋もれた、色白で岩みたい頬がごつごつしている葉子が、ぱっと大きく腕を広

げて冗談ぽく大きさに私を抱きしめた。葉子の目のまわりがいつもより黒かったけど、ぼつちりメイクをしたんじゃなくてそのメイクが落ちかけているようだった。

私も吸い寄せられるようにその中に自分から飛び込んだ。お互いコートの下にもたくさんブレザーもセーターも、私はスウェットも着ていてごわごわしていたけれど、ほんの一瞬でも気を緩めたら泣きそうなくらいに緊張が弛んだ。

「斎藤ひとりだって書いてあったからちよつと心配したんだよね、えっ、どこにいたの」

「ニューデイズとかジュースんどこにいた、ねえすごいんだよ、ジュースのさ、ジューサーあるじゃん、それがなんか落ちちゃって床バナナジュースだらけで！」

「まじ、こっわ」

「りん、今日めっちゃ着込んでない？ あんた細いからそれぐらいでちようどいいよ」

「なんか、なんていうの……濡れた子犬みたいにやってきたね」  
「なにそれえ」

私を取り囲むようにみんなも、私の話を笑いながら聞いて、話してくれる。さっきまで笑えなかった話を、面白いネタみたいに私はべらべら早口でしゃべる。頭が考えるより先に言葉が動く。寝不足もあって、もう目も脳も上手く働かなくて何を言っているのかもわかりきっていないままだった。この恐ろしいくらいのハイテンションの原動力が、一体何なのかもわからない。

「ねえ、うちもう帰れないから学校行こうと思うんだけど」

私の爆走を止めたのは鳴ちゃんだった。

「小田急動いてる？」

「止まってるけど、歩いていけるじゃん。町田から歩いたことあるんだよね。もう寒いからどっか入りたい、もうどこも入れないっぽいし」

「そうなの、じゃああたしもそうしようかな」

「ええ、どうしようかなあ、本当に今日電車もうないの？」

「みたいだよ」

「じゃあうちもお」

みんなが携帯を出して、色々見ながら話を収束していく。

えっ、もう？ もう終わっちゃうの？ 学校いくの？ どうしよう、私学校より家がいい、家。誰かんちでもいいんだけど家がいい……  
…なんでかわかんないけど家……

「斎藤と葉子はどうする？」

「えっ……私……どうしようかな、ええ、学校かあ……」

町田から菊名まで、電車で座っていれば二十五分で着く。でも歩いたらどうだろう。成瀬までの距離でも、歩いたことがない。帰る方法は足が生えているなら一つもないわけじゃあないんだけど、だって、こんな寒いし靴はローファーだし、無理だよ。ねえ、学校まで引き返すのもいやだ。早くブラとって上下スウェットかジャージでヒーターの前であったまって電気毛布入れたベッドで寝たいのにもめんどくさいもん。ねえ嫌だよ、なんか何が嫌ってのものないんだけどとにかく嫌だ。……あ、鳴ちゃん、ちよつとキレそうなかんじだ。早く決めろってこと？ そんなすぐに言われても。

「どうしよ、もし本当に今日電車止まってんならあとで学校行くよ。お腹減ったし、斉藤、どっかいかない？」

葉子が急に冷静になって答えた。というか、葉子はいつもこんなそっけなくて、何にしても一歩引いていて、興味無さそうな物言い

をする。さつきみたいいなテンションは、しょっちゅう見るわけじゃなかった。といっても、めずらしいわけでもなかったけど。

「じゃあそうする！」

本当はよく飲み込めていなかった。学校に行くのに気が引けていたのは確かなんだけど、よくわかんないままに口がまた勝手に事を進める。

「わかった、もし来るようだったらメール……ああだめかあ、ミクシイでもいいから教えて」

「うん」

「じゃあねえ」

急にみんながするっといなくなっていく。あっさりと何の未練も無しに、この空間からいなくなってしまった。寂しくは感じなかった、でも教室みたいな感覚は一瞬で消えて、私と葉子の二人、またアウェイになった。

「はあ、よかった」

葉子が溜まった古い息を吐き出した。白い息がもわわと漂った。

「うち親戚が町田なんだ、おばあちゃんが」

「そうなの？」

「そー。ホントはさ、家帰るとき方面同じだから斎藤が来たとき、一緒につれてこっかなうって思ったんだけど。みんないる前でほら、そんなん言えないし」

「そりゃね、そうだよね」

「もう大変だったんだよ、斎藤来る前にあいつら途中で腹減ったつてうるさくて、うちと周子置いて突然どっか行っちゃって、んで戻ってきたらなんか」

息つぎをして、ぷって少し笑いを漏らして、目を見開いて。

「チーズバーガーア食ってんのお！ しかもうちと周子、ああ周子さつきまでいたんだけど、まあうちの分買ってきてないっていうね！ 周子舌打ちしてたし！ はりたおしたるかって！」

「うーわ、うける、うっぜええ！」

それはもう、まくし立てるように、それまで溜まって溜まって溜まってもうぶち切れそうなほど溜めた鬱憤を一気に、嬉しそうに吐きだした。その様子があまりにおかしかった。

「まあそれで最初はみんなもおばあちゃん家つれてこうかと思ってたけどね、そんな気失せたよね。周子はあ、なんか、たまたまお兄ちゃんが車でこちらへんいたらしくて帰った。はあ……じゃあ、行くか。バスは動いてるみたいだからバスだよ、つかその前になんか食べもん買う？」

「やつてるところある？」

「まあ、マックはやつてるでしょ」

葉子はものすごくシニカルに笑った。きっと感じ悪くて怖いはずなのに、また泣きそうなくらいに安心した。

「じゃあチーズバーガー買おっか」

私もおんなじように、漫画みたいに嫌な笑いをした。葉子は大きく手を叩いて笑った。パンツパンツと、乾いた気持ちのいい音が鳴った。申し訳なくらいに、教室みたいに、いつもの帰り道みたいに、その場だけとはわかっている上での楽しさだった。

バスの中は、最初バスターミナルで入ったときの半分ほどになって、熱気も喋り声も薄くなっていった。窓の向こうの夕日も赤みを増して、街灯の白い明かりがつき始めている。膝の上に置いたマツクの紙袋の油染みも、もう広がり終わった。ときどき鼻に付く脂の臭いも新鮮さを失って、ふとした瞬間に立ち込める臭いでも食欲が思い出せない。

一つ前のバス停を発車したとき、葉子はすぐにボタンを押した。乗り慣れないバスだと、電車みたいに速度を落として明らかにもう駅が近いなって感覚がなくて、一応停車の音は直前に鳴るっちや鳴るんだけど、普通に信号で止まるみたいに停まるから、いつまで乗るのがわからない。

マツクの前には、これこそ長蛇の列というんだらうってくらいに人が並んでいた。店内は満席どころか、お持ち帰りのみで対応していた。でも回転が遅いわけじゃなくて、作っては出して作っては出してを繰り返しても続々と人が並ぶから、いつまで経っても列が言わらないようだった。並んでいる最中に少し大きな余震が来て、目の前に並んでいた大学生なのかな、なんか若い男の人二人組がやけに嬉しそうだつた。もしこのままずっとこんな風に大きい地震が続くんだったら、菊名に、家に、もう帰れないんじゃないかって、不安は一度始まると強弱をつけて長く続く。でも隣の葉子は腕を組んで、揺れてるねえ、と一言つぶやいただけだった。葉子の肩に両手を置くと、「なんだよビビリ」って笑った。

怖くないのって訊いたら、うん、と答えた。なんでって訊いたら



困ったように、なんでだろう、って答えた。よくわかんないけどそんなに怖くないなあって、ちよつと考えたのか間をあげてから付け足された。

私はバスの中でも怖くなった。通り過ぎていくコンビニの明かりがついていなくて、それでも普通に犬の散歩をする人もいた。こうしてバスは動いていても、いつこのバスがひっくり返るのかもわからない。一秒先がどうなるかわからなくて怖いと感じるのは、初めてかもしれない。

ゆっくりバスが停まって、プーっと停車音が鳴った。降りるよ、と葉子が言っ、私は急いで足の間に置いていた鞆を持った。肩がひきちぎれそうなくらい重かった。

葉子の少し後ろで歩いていくと、急に明かりひとつない住宅地が見えた。

「あれ、なに、停電？」

「待って超こわい」

「うち……っていかおばあちゃん家、こっちだよ」

お化け屋敷に入るみたいに、葉子が笑った。

「え、なにこれほんと怖い、まっくら」

さつきより陽が落ちるスピードが上がっている。夕陽しか明かりが本当にない。その陽に当たった雲の影が生々しく黒くて、広い広い住宅街と送電塔にも、デッサン画みたたな濃くくつきりした陰影がある。私達が歩く空よりもずっと低い地面に近い道には、太陽が届かずにただずっと暗い。テレビの音もない。静かで真っ暗で不気味だった。

「大丈夫だって、すぐだし」

ローファーがアスファルトと擦れる音、鞆についたキーホルダー

がぶつかる音、葉子の呼吸の音、マツクの臭い、太もを刺すような冷たい風。ひたすら歩く中にこれだけしか、私の知っているものがなかった。

「停電とか初めてなんだけど」

怖いと思う気持ちを忘れるか、何かに代えられないかなって思った。きつと葉子は、こんな真っ暗な街を怖いって思わないで、面白いとかすごいって思えるんだろうか。

「うちも初めて」

「昔の人ってさ、電気無かったわけだからこれが普通なんだよね」

「そうだね、うち理系だからよくわかんないけど」

「これ理系関係なくない？」

「ほら、いつから電気が普及したとか、そこまで深く知らないし」

「むしろ文系もそれ詳しい人いないんじゃないの」

「日本史頑張れよ」

「いや私世界史だから」

「世界史も頑張れよ」

「エジソンだ」

「エジソンって有名だけど何した人なの」

「えっ、葉子それは馬鹿すぎるよ」

「だからうち、理系だから」

まだ私も、そこまで歴史をみっちり勉強し始めていなかった。文  
化史は後手の後手にしちやいけないのは先生から言われていたけど、  
頭の中で蒸気機関車と電球のイメージがぼんやり浮かんだあと、映  
画とかアニメで見る十九世紀のロンドンみたいな絵がうっすら出て  
くる。でも結局資料に残っているのは白黒だから、いかに夜道が明  
るくなって、その時のロンドンの人が喜んだかなんて、実際その写

真を見たところでピンとは来ない。

「でも毎日こんな暗くて、とつぜん電気出てきたら嬉しいよね」

「そうだろうね……いやわかんない、だってうちらはさ、電気あるのが普通なんだから安心はするけど、昔はそんなの全くなかったんだからビビるっしょ」

「食いついてきた！」

「いやそう思うだけだから！」

葉子が急に私の方に体をむけて、ぶつからないように足がきゅつと止まった。ごめんそこだ、と葉子が指さした家の先が、真っ暗でよく見えなかった。でも葉子はさっさと家の前に行って高い石段を登ってインターホンを押すと、すぐに玄関のドアが開いた。頭に白いタオルか布を巻いているのか、それだけがぼやーっと見えた。

「ようちゃん、ママから聞いたよ、よかった無事だったんだね」

「うん、あ、これ斎藤っていつて、友達」

「斎藤？ ちょっとなんでもいいから、寒いから早く家上がんなさい」

「おじやまします」

馴れ馴れしいのに、少しかしこまったように葉子が言った。私も小声で言った。

でも家の中も外と大差ないくらいに冷えていた。風がないだけマシ、みたいなくらいに。家の中も真っ暗で、葉子のおばあちゃんが大きな懐中電灯で足元を照らしてくれながらリビングに入った。

「斎藤、なにちゃん？」

「凜、です」

「りんちゃん。家遠いんでしょ？ 横浜？」

「菊名なんですけど、帰れなくて」

「あっそおお、ごめんね、停電でヒーターもつけられなくて。よう

ちゃんとりんちゃん来るのはママから連絡来てたから着替えとお布団しいといたよ。お腹空いてるでしょ、なんか探してくるから早く着替えちゃいなよ、風邪ひくから」

「食ってきたからそんないっぱいはいらないよ」

「あらそお？ でもお茶くらい飲むでしょ。あ、足元気を付けてね、真っ暗で見えなくてさあ、なにが落ちてるかわかんないのよお」

「えっ、お湯出るの？」

「ガスはね、大丈夫みたいなんだけどさあ。だからお湯は沸かしといたんだよ。でもさあようちゃん、この前、本当にこの前ね、ガスのヒーターから電気のやつに買い替えたばかりだったんだよ。変えなきゃよかったね、電気だめだね」

足元に何か冷たく固い、まっすぐなものが触れて、ギ、とフローリングを引っ掻く音がした。すみませんって言う前に、葉子のおばあちゃんが「気をつけて！」と声を張った。

葉子は懐中電灯で照らされた布団の上に乗って、すぐコートを脱ぎ始めた。私もコートを脱いで、布団の上にあった畳んでいたけど崩れちゃってるようなパジャマに着替えた。ウエストが少し大きくて、ずりおちないように上をズボンに入れて、その上に着てきたトレーナーでズボンにインを隠した。それでも、あったかいとは言えないくらいだった。

「さびー」

毛布にくるまって、葉子が携帯を開いた。携帯の白くて強い光が、葉子の顔をもっと真白く見せる。なんか、よくある暗い部屋の中でネットをやってる人みたいな画だった。

「てかなんで連絡とれたの、電話つながんくない？」

葉子が大声でおばあちゃんに言った。

「それがね、一回だけ繋がったんだよね、ママから家に電話来て、ようちゃんが友達とそっち行くみたいだよって。ようちゃんだつてなんでママと連絡できたの」

「ツイッターで送った」

「へえー、なんかよくわかんないけどよかったね。あ、ようちゃんようちゃん、おばあちゃん今両手塞がってるから懐中電灯やって」

「はあ」

葉子は立ち上がって、地面に光りを当てた。そろそろとおばあちゃんやんがやってきて、マグカップと小脇にビスケットの箱を抱えていた。葉子はそのビスケットの箱をすつと何にも言わないで持ってあげていたのを見て、私は、まだ家に帰れていなかったのを思いだした。

「斎藤、親と連絡取れてる？」

携帯をまた開いて、葉子は布団の上に座って、手元を明るくしながらビスケットの箱を開けた。大きな筒状のマグカップから甘くて、紅茶かな、なんだか似合わないほど上品な香りがした。葉子のおばあちゃんは懐中電灯を片手に隣の居間へ、ひっそりと襖を閉めた。

「一応メールは送ったけど」

もう一度、私も 아이폰を出してメッセージを開いた。急に強い光が目には直接入ってきて、目が無理やり起こされたみたいだった。充電の残りが十パーセントの通知が出た。

「じゅうで」

あ、と言葉が切れた。充電なんてできない。

「電気戻ったらね」

葉子が個包装のビスケットを開けて、ごりごり咀嚼する音が響く。そして紅茶をゆっくり啜った。

「あっ……ちい！」

「ああ、届いてるみたいだから大丈夫かも」

最低限のメールチェックだけして、アイフォンの電源を切った。

ざくざくと網膜を刺した光が消えると、もつとあたりが暗く感じた。

「コンタクトどうしよう」

「うち今日つけっぱでいいや。見えないし。洗浄液たしかここあるはずだから朝やる。ツーウィーク？」

「うん」

「じゃあちよつと我慢しておくれ、化粧落としは持つてるよ」

「あ、じゃあ使ってもいい？」

葉子は鞆を引き寄せて、携帯で中を照らしながらポーチを出した。折りたたみの携帯を途中まで曲げて、化粧落としのシートを出した。私は目だけしかやっていなかったけど、顔が洗えなさそうだったから、まず目もとのメイクだけを落として、おでこほっぺも拭き取った。葉子は二枚使って顔の垢ごと落とすようにごしごし擦っていた。

まだ、ビスケットも紅茶も、葉子みたいに布団の上であぐらを掻いて……もうあぐらは掻いているけれど、それはまだとりあえず座する方法があぐらしか見つからないだけで、私にとってはここも、外と大差なかった。葉子の平常心が、かろうじて私の恐怖を中和してくれているだけなんだ。本当はまた揺れるんじゃないかって不安だった。けれど、それを「こわい」って言うのがわかっていて、葉子がいつもみたいに「大丈夫だって」って言うのがわかっていて、それが嫌なわけじゃない、気を遣わせているのが後ろめたいわけでもない。今さら気を遣わずだとか、私と葉子はそんな仲じゃない。それがわかっていて、別に申し訳ないわけじゃない上で、言えなかった。

なんでなんだろう。少しも、言えなかった。

「それならよかった。あ、鳴達にミクシイやってねえ………まあ………いっかな、めんどくせえし。つかまだ停電直ってないわけ？」

葉子は本当に自由に、暗闇の中でもためらいも、床に何が転がっているかも気に留めず立ち上がって、後ろを振り返った。シャーっと音がしたから、カーテンを開いたことがわかった。そして大きな窓から、携帯よりも明るくて優しい光が、紅茶の香りみたいにふわっと葉子の横顔のふちを照らした。

「ねえ見て、すごい、月が明るい」

「わ、ほんとだ」

私は立ち上がれなかった。

ほぼ初対面の人の家で、月にはしゃいで布団の上のマグカップを倒すことが怖かった。座ってあぐらを掻いたまま、低いところから葉子のシルエットだけをただ見つめていた。手に握ったままの化粧落としのシートで、指がぬるりと滑った。

(続)